

Hop Step Jump

15

初任者研修第 13 回
児童生徒理解を深めるために④

今回のテーマは『いじめ防止・対応を中心として』。講師は、箕面市青少年指導センター館長、俵積田 武志先生でした。今回は新規採用の養護教諭、学校事務職員も含めての研修です。実際の対応でも、チームとしての学校の力が問われています。

グループワークの中で、それぞれの先生が子どもとのかかわりの中で大切にしていることに触れることができました。子どもからの聞き取りにおいても、まず事実確認をきちんとする人、子どもの背景を考える人、子どもに寄り添うことを大切にしたい人、いじめ対応において、どれも正解だと思うし、大切なことだと思います。だからこそ、先生間で連携・相談して子どもにとってよりよい方法を見つけ出すことが大切だと思いました。

いじめの事例検討のワークでは、中学校と小学校で対応の仕方が異なってくるのだと知りました。中学校では、より厳しく、事実から指導するのだと感じました。いじめで自殺する子どものニュースを見るたびに、どうしたらいいものかと悩みます。自分のクラスでも嫌がらせなど、人を傷付けることがある子がいるので、今も日々悩みながら対応しています。

同じ内容に対しての対応でも先生によっては勿論ですが、校種間によって興味深い対応があり勉強になりました。最後の先生の一言「他の子も皆知ってたんよな」の言葉が心に残りました。加害者、被害者がスポットライトをあびそうですが、集団作りの大切さを改めて感じました。ありがとうございました。

いじめが原因で若い命が失われるという悲しい出来事が未だ後を絶ちません。報道により明らかにされるものを見ているといつも、「あの時、…していればよかったのに」「なぜ…できなかったのだろうか」などと思うことも多いのですが、これこそ多くの目で子どもたちを見守らなければならない理由ではないでしょうか。初任の先生が 5 人集まるだけでも、いろいろな観点で話ができるわけです。一方、こういった事例検討は会議の方法も教えてくれます。正解のない問いに対して、納得のいく解（納得解）を生み出し、足並みをそろえて行動するための、大切な方法です。ゴールの確認、ポストイットによるブレインストーミングと分類や整理。事実関係や思考を可視化し、めざすべきゴールに向けて、考えなければならないことに漏れがないか確認しながら進みます。

今日のように、1 つの事案に対して多くの先生がたと話し合える人間関係、学校としての習慣がとても重要のように感じます。

これこそ同僚性だと言えます。職員室では日常、子どもたちの日々の成長について、プラスの出来事ならその瞬間に出会えた喜びを、マイナスの出来事なら心配している気持ちを、アサーティブに伝え合うこと。教職員同士が、いつも子どもたちを中心に置き、教育の専門性をもって対話し、互いに学ぶことが大切です。

事例のお話をきいているだけで、すごく胸が痛くなりました。今日の研修で対策方法を考えましたが、その方法で本当に解決できるかはわからないなと思いました。ただ、絶対に私一人の力では何の力にもならないと思ったので、他の先生方と協力することの大切さを学びました。

多くの場合、解決までそう簡単にはいきません。頭を寄せ集めて考えた道筋だったとしても、壁にあたれば修正すればいい。粘り強く、あきらめず取り組み続けることこそ、私たちの努めではないでしょうか。また、多くの人が関わっていることを子どもたちが知ること自体も大切だと言えるのではないのでしょうか。『助けて』と言うことは、何もはずかしいことでないこと、協働している姿は、『自分一人だけで頑張らないで』というメッセージにもなります。

計画では、いじめをなくすためのメッセージを作成するという課題も準備いただいていましたが、事例検討に力が入ったためにメッセージ作成まで到達できませんでした。でもこの課題、5 分や 10 分でできる課題でないような気がします。ただ美辞麗句を集めるのでない、『本気』を伝えるメッセージ。俵積田先生の最後の言葉は胸に突き刺さりました。「他の子も皆知ってたんよな」って。周りの子たちはどんな思いで見いていたのでしょうか。もしかしたら人間関係の希薄さを生む根底には学校があるのかもしれない。子どもたちが多様な仲間から学び、人に希望を持ち続けられるように、最も身近な大人として、私たちは子どもの前に立っています。